



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

## コワイの認知科学

川合伸幸

地震、雷、火事、親父。怖いものの代表格です。しかし、本当に誰もがコワイと感じるのはヘビ。その理由は、高い樹上で暮らしていたヒトの祖先の霊長類を捕食できたのは唯一ヘビだけだったからです。猛禽類や大型のネコ科の動物は高くうっそうとした細い枝の上にいる霊長類を襲えません。唯一の捕食者であったヘビを効率的に見つけるために霊長類の脳は大きくなった!という、一見するとトンデモ学説のような仮説があります。しかし、多くの研究がその仮説を裏づけています。私た

ちが、幼児、成人、ヘビを見たことのないサルを対象に行った研究では、ほかの動物よりもヘビを見つけ出すのがいずれも早いという結果が得られました。危険な爬虫類のワニやトカゲ、長い身体のイモムシは注意を惹きつけません。脳波を使った実験でも、ヘビだけが特別な注意を惹くことがわかりました。

こんなことを高校生や大学の初学者向けに書いた本です。ヘビの話だけでなく、ジェットコースターやお化け屋敷での恐怖の抑え方や、「ケータイ恐怖症」についてもわかりやすく説明しています。



監修 日本認知科学会  
著 川合伸幸  
発行 新曜社  
四六判 / 130頁  
定価 本体1,600円+税  
発行年月 2016年2月

かわい のぶゆき  
名古屋大学大学院情報科学研究科准教授。専門は実験心理学、認知科学。著書はほかに『ヒトの本性：なぜ殺し、なぜ助け合うのか』（講談社現代新書）、『心の輪郭：比較認知科学から見た知性の進化』（北大路書房）、『はじめての認知科学』（共著、新曜社）、『キーワードコレクション 心理学フロンティア』（分担執筆、新曜社）など。

## 子どもの社会的な心の発達 コミュニケーションのめばえと深まり

林 創

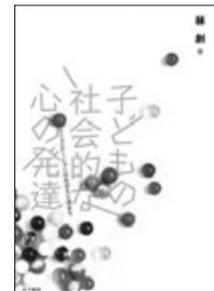
他者とかかわるのに欠かせないこと、それは「その場に応じて柔軟に変化させるコミュニケーション」ではないでしょうか。他者から発信された言動を瞬時に理解し、文脈にあわせて応答する——ふだん無意識にこのようなことができますが、とても高度で神秘的な心の働きです。私たちはいかにして身につけてきたのでしょうか。

本書は、そうした〈他者に心があることがわかる〉心が育つようすを、「心の理論」や「メタ認知」などの視点から俯瞰的にまとめました。「うそ」や「道徳性」、

コミュニケーションの発達を中心に、日常場面や教育場面に知見を活かそうと試んでいます。ドラマや映画のエピソードも取り入れ、発達心理学の面白さがわかりやすく伝わることを目指しました。

本書は、学生や教育現場の方々、一般の方々などとともに考え、教えていただいたこと、そして研究者の先生方からもご示唆いただいたことの賜物です。

研究と実践が結びつくことをねらって、全力でまとめましたので、ぜひ多くのおみなさまにお読みいただけましたら幸いです。



著 林 創  
発行 金子書房  
四六判 / 200頁  
定価 本体2,200円+税  
発行年月 2016年2月

はやし はじめ  
神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。専門は発達心理学、教育心理学。著書はほかに『他者とかかわる心の発達心理学：子どもの社会性はどうに育つか』（共編著、金子書房）、『大学生のためのリサーチリテラシー入門：研究のための8つの力』（共著、ミネルヴァ書房）、『問いからはじめる発達心理学：生涯にわたる育ちの科学』（共著、有斐閣）など。



著 猪原敬介  
発行 京都大学学術出版会  
A5判 / 306頁  
定価 本体3,600円+税  
発行年月 2016年3月

いのはら けいすけ  
日本学術振興会特別研究員（電気通信大学大学院情報理工学専攻）。専門は教育心理学、認知心理学、認知科学。著書はほかに『文章理解の認知心理学：ことば・からだ・脳』（分担執筆、誠信書房）、『言語心理学入門：言語力を育てる』（分担執筆、培風館）など。

## 読書と言語能力

言葉の「用法」がもたらす学習効果

猪原敬介

本書は、「言葉の学習としての読書」という観点から、読書のもつ教育的効果について述べたものです。2部構成になっていて、第1部では、読書と言語能力についての教育心理学的研究について述べています。読書が言葉の力を伸ばすという因果関係の実証や、その効果の大きさの推定にはまだ課題があります。現状で、何が分かっているのかを解説しました。第2部では、読書を「言葉の用法」を大量に学べる貴重な学習機会である、と捉えた認知科学的研究について述べています。言葉の用法情

報だけでも、人間に近い言葉の学習ができることがシミュレーション研究から示されており、言葉の学習について新しい見方を与えてくれます。

教育政策や学校現場での取り組みとして「教育としての読書」をいかに活用すべきかを議論するためには、客観的な方法で得られた知見が必要です。日本では、読書の効果について科学的エビデンスに基づいて議論した書籍は非常に少ないと思います。本書によって、知見の普及や建設的議論に貢献することができれば幸いです。



編著 太田信夫・佐久間康之  
発行 北大路書房  
A5判 / 320頁  
定価 本体3,600円+税  
発行年月 2016年2月

おおた のぶお  
東京福祉大学教授、筑波大学名誉教授。専門は認知心理学、教育心理学。著書はほかに『Dementia and memory』（共編著、Psychology Press）、『Memory and aging: Current issues and future directions』（共編著、Psychology Press）、『現代の認知心理学（全7巻）』（編集代表、北大路書房）、『記憶の生涯発達心理学』（共編著、北大路書房）など。

## 英語教育学と認知心理学のクロスポイント

小学校から大学までの英語学習を考える

太田信夫

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、世の中は年々英語熱が高まっている。文部科学省も英語教育を小学3、4年生までおろし5、6年生では英語を正式教科としようとしている。また中学・高校では、英語の4技能のうち、従来、軽視されがちだった「話す、聞く」に力を注ぐ具体的な方策を実施しはじめている。

このような背景において、本書は英語教育への貢献を目指す異分野の研究者のコラボレーションの結果をまとめたものである。認知心理学者による英語学習に関する

研究と、英語教育学者による実践的研究をいくつか紹介し、両者の討論を試みた。問題意識を共有すれば、異なる学問分野における共同研究は、1+1=2以上の成果を発揮することができる。本書は、このように認知心理学の理論的研究と学校現場での実践的研究との統合を試みたものである。だが現実には、理論と実践との間に少なからずギャップがある。特別寄稿してくれたエディンバラ大学のローギー教授もこのあたりの重要性を強調されている。このギャップを埋める研究をさらに進めたい。